

ボストン茶会事件をめぐる記憶とアメリカ史

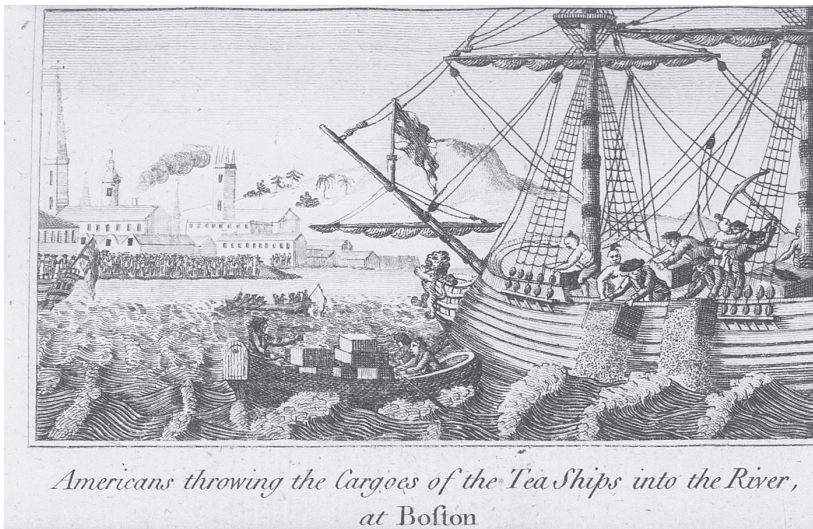
—— Alfred F. Young, *The Shoemaker and the Tea Party:
Memory and the American Revolution*
(Boston: Beacon Press, 1999) ——

久 田 由佳子

中間選挙を間近に控えた2010年秋、オバマ大統領の政策に反対する「ティーパーティー」（茶会）と呼ばれる集団の動向がマスメディアの注目を集めた。この名称は、植民地時代末期にボストン港でおこった「茶会事件」にちなんでいとされるため、「ボストン茶会」そのものがメディアで取り上げられる機会も増えた。ここで取り上げる、アルフレッド・F・ヤング著『靴職人と茶会事件』は、1999年に出版されたものであり、書評として取り上げるには遅きに失した感もある。しかし、この事件がどのような経緯で「茶会」と呼ばれるようになったのか、あるいは民衆の抗議行動と茶会事件はどのような関係があったのかを再検討する上でも、本書を日本語で紹介する意義がある。

周知のように、ボストン茶会事件は1773年に制定された茶法に対する、英領北米植民地住民の抗議行動の1つである。しかし、しばしば誤解されるように、茶法そのものは茶に対する課税を定めたものではない。茶税は、1767年制定のタウンゼンド諸法によって始まり、激しい抗議行動の末、1770年に同法の規定の大半が撤廃された際にも継続されることになった。茶法は、英国東インド会社に植民地における茶の独占販売を認め、同社が輸入する茶に対する関税を引き下げるものであった。植民地商人の多くは、オランダなどから茶を密輸入し、安価で販売していたが、茶法によって密輸入の茶よりも東インド会社による正規輸入の茶のほうが安価になった。こうしたことが植民地人たちの本国政府に対する不信感をよりいっそう高める結果となったのである¹⁾。

1773年12月16日、ボストン商人を含む「自由の息子たち」を名乗る集団の計画によって、先住民のモホーク族に扮した一団が、ボストン港に入港した英国東インド会社の船3隻から積み荷の茶箱342個を海中投棄した。一般に普及している話では、人々が「ボストン港をティーボットにし



【図1】イギリスで出版された、ボストン茶会事件を描いた版画（1789年）

出典："Americans throwing the Cargoes of the Tea Ships into the River, at Boston," Engraving from W. D. Cooper, *The History of North America* (London: E. Newberry, 1789), us0012_01, Rare Book and Special Collections Division, Library of Congress, Washington, D.C.
<http://myloc.gov/Exhibitions/creatingtheus/Pages/default.aspx> (accessed October 20, 2010).

てやる」と叫んだことから、この事件は「ボストン茶会」と称されるようになったといわれている。しかしながら本書の著者は、同時代の新聞等においては、同事件が「茶の投棄」もしくは「茶箱の破壊」(the destruction of tea)として記されていること、「茶会」の語が活字で登場するのは1830年代以降であることを発見した。また著者は、初めて「茶会」の語がタイトルになった2冊の本が、いずれも「茶会」に参加したという元靴職人の聞き書き、いわゆる「オーラル・ヒストリー」に基づいていたことも指摘している。確かに、1789年にイギリスで出版された版画にも、1846年にニューヨークで出版された版画にも、キャプションには「茶の投棄」「茶箱の破壊」と記されている（【図1】【図2】参照）。

著者は北イリノイ大学名誉教授で、独立革命期の社会史研究で知られるが、もともとボストン茶会事件そのものに関心があったわけではなかった。彼がこの問題に関心を寄せたのは、革命期ボストンの職人層に関する研究



【図2】 カリアとアイブズによるボストン茶会事件を描いた版画（1846年）

3隻の船のうち2隻のみ描かれたこの絵では、全員が先住民の変装をし、見物人の服装は中間層以上であることを示している。しかし、実際には全員が変装していたわけではなく、真冬の中で上半身裸であったはずもなかった。また、参加者、見物人ともに多数の下層民が含まれ、にぎやかな声援もなかった。

出典：“Destruction of tea at Boston Harbor,” ([New York]: N. Currier, 1846), LC-USZ62-9, Library of Congress, Prints and Photographs Division, Washington, D.C.
<http://hdl.loc.gov/loc.pnp/pp.print> (accessed October 20, 2010).

がきっかけだった。二部で構成される本書の第1部は、著者が直接この事件に関心を持つきっかけとなった、靴職人ジョージ・ロバート・トゥエルヴズ・ヒューズという人物に焦点が当てられている。彼がなぜ職人層の中でも最も貧しい靴職人にならざるをえなかったのか、彼が「ボストン虐殺」の際に何を目撃し、「ボストン茶会事件」でどのような役割を担ったのか、革命期に私掠船の乗組員として、また民兵としてどのような活動に従事したのか、戦後の生活はどのようなものだったのか、晩年、どのような経緯で英雄として注目されるに至ったのかが、彼からの聞き書きとともに同時代の新聞、裁判所や軍隊などの記録を用いて再構築されている。

記憶は、時の経過とともに変化するものであり、回想録やオーラル・ヒストリーを歴史家が史料として利用する場合には常に注意が必要である。

ニューディール期に採取された元奴隷の聞き書きを史料に用いる歴史家と同様、著者も、ヒューズの回想をもとにしたジェイムズ・ホークスとベンジャミン・B・サッチャーの手になる2つの伝記²⁾の信憑性を疑いつつ、同時代の新聞や公的記録といった一次資料と、これまで書かれた独立革命期に関する二次資料に依拠しながら、ともすれば貧しい無名の靴職人として一生を終えたかもしれないヒューズの生涯を明らかにする。

第2部は、いつ頃からボストン港の茶の投棄事件が「ボストン茶会」という名で呼ばれるようになったのか、事件当時の様子、ボストン茶会事件を含む、独立革命期の事件が19世紀後半までに歴史としてどのように認識されるようになったのかを明らかにする。本稿では、この第2部を中心に紹介する。

本書第2部の第1章から第5章までは、1770年代から1820年代にかけて、独立革命はどのように一般市民に記憶されていったかが扱われる。著者は、この間に政治的指導者が、独立革命の記憶について、望ましいものとそうでないものを峻別し、望ましいもののみを顕彰しようとしていたことを指摘する。すなわちエリック・ホブズボウムらの指摘する「伝統の創出」³⁾が、アメリカにおいても独立50周年を迎える間に顕著に見られたというわけである。建国初期においては、7月4日の独立記念日に新しい国民意識を根付かせるために様々な儀礼(パレードや演説など)がおこなわれ、一般民衆に対して独立革命の理念や理想的な市民像が提示されたが、独立革命期の事件にはこうしたパレードや演説などのテーマとして取り上げるべきものとそうでないものが混在していた。とりわけ建国初期のエリート層にとっては、18世紀に根付いていた暴徒の町ボストンのイメージを払拭することが重要であり、こうした暴徒のイメージと結びついた事件は、革命後に積極的に忘却されていくことになる。実のところ、こうした事件の1つがボストン茶会事件だったのである。

植民地時代のボストンでは、毎年11月5日の「法王の日」(イギリスの「ガイ・ホークス・デイ」)に職人や若者による無礼講がおこなわれていたが、植民地の政治的指導者は、この習慣を下層民の不満のはけ口として黙認していた。イギリス本国の北米植民地への介入が顕著になった18世紀半ば以降、「自由の息子たち」を名乗る一団は、こうした下層民のエネルギーを反英運動に利用した。1765年から66年にかけての印紙法反対運動では、「自由の息子たち」が「法王の日」に活躍していた下町のギャングの指導



【図3】ポール・リヴィアが出版した、「ボストン虐殺」を描いた版画

出典：“The bloody massacre perpetrated in King Street Boston on March 5th 1770 by a party of the 29th Regt,” (Boston: Engrav’d Printed & Sold by Paul Revere, 1770), LC-DIG-ppmsca-01657, Library of Congress, Prints and Photographs Division, Washington, D.C. <http://hdl.loc.gov/loc.pnp/p.print> (accessed October 20, 2010).

者と協力関係を結び、この日に使っていた山車や悪魔や法王をかたどった人形などを示威行動に使ったり、本国から任命された役人らに対して「タールと鳥の羽」を塗りたくるリンチをしかけたりした。「印紙法暴動」もそうした行動の1つであった⁴⁾。1770年3月5日の「ボストン虐殺」もまた、下層民による投石等の暴力行為に対して、ボストン税関の哨兵が自己防衛のため発砲した結果であり、銀細工職人ポール・リヴィアの手になる版画で普及したイメージとは大きく異なっていた（【図3】参照）。版画の中で犠牲者たちは、無抵抗で丸腰の身なりの良い市民として描かれているが、

こうした良き市民としての犠牲者のイメージは、1771年から1775年まで毎年3月5日に開かれた追悼集会で積極的に喧伝されていった。

実のところ、「ボストン茶会事件」もこうした暴力事件の延長線上にあった。この事件は違法行為であり、参加者は事件について黙秘することが義務づけられたため、具体的な参加人数や組織系統は不明なままである。しかし複数の回想録等から、直接行動に参加したのは150人程度であったと考えられている。著者の推測では、このうち30人から50人程度が「自由の息子たち」の実働メンバーで、これに事前に誘われて参加したヒューズのような職人層のボランティアと、当日の高揚感に押し流された若者たちが加わった。事件当日、イギリス海軍の艦船数隻がボストン港を巡視する中、波止場にはおよそ1000人から2000人の見物人が詰めかけ、3時間にわたる行動を静かに見守ったとされている。

ボストン茶会は、既存の社会秩序の逆転という点で、それまでの事件とは一線を画していた。東インド会社の私有財産、価格にして9659ポンド相当の茶を海中投棄し、本国議会の決定も軍隊をも無視したこの事件は、2つの点でカーニバル色の強いものであった。第1に、「ボストン港をティーポットにする」という発想は、上流層の、もっぱら女性を主役とする茶会の流儀作法を嘲笑するものであり、これまでの暴動で富裕層の家の窓ガラスや鏡、家具などを打ち壊した経験のある民衆にとって、350重量ポンドの茶箱をこじ開けて海中に投棄するのは、上流階層への憤りを発散させる手段にもなった。第2に、参加者が先住民モホーク族の変装をした点である。この変装については、最初から計画に関わった者は先住民の服装を身につけていたが、多くの場合は煤で顔を黒く塗った程度であった。著者は、歴史家フィリップ・デロリアの研究を引用しながら、先住民を演じるという行為に4つの機能があったことを指摘している⁵⁾。第1に、変装によって参加者の特定を困難にし、逮捕を免れるため、第2に、人を恐れさせるシンボルとして先住民を選択した点、第3に、仮装行為によって人々が既存の社会秩序から解放され、大胆になれるという点、第4に、裏で指揮をとった指導者たちにとっては、植民地政体の構成員ではない「よそ者」の犯行とすることで責任逃れが可能となる点である(無論、いずれも彼らが本物の先住民とは信じていなかった)。ボストンでは、この事件後しばらく、先住民が抗議行動のモチーフとして利用され、例えばボストン茶会と同様に、60人からなるグループが先住民に変装して茶の海中投



【図４】 1774年にイギリスで出版された、ボストン港閉鎖法案に関する風刺画

出典：“The able doctor, or, America swallowing the bitter draught,” (London: May 1, 1774), LC-DIG-ppmsca-19467, Library of Congress, Prints and Photographs Division, Washington, D.C. <http://hdl.loc.gov/loc.pnp/pp.print> (accessed October 20, 2010).

棄をおこなったり、ポール・リヴィアがイギリスの風刺画（【図４】参照）を真似て、アメリカの表象として先住民の女性を用いたりした。

人々に強烈な印象を残したこの事件は、しかしながら多くの人々に共有される「公的記憶」とはならず、むしろ家族の間や親方と徒弟の間などでひっそりと個人的に伝えられていくこととなり、独立記念日の7月4日のみが独立革命に関する記念日として顕彰されるようになった。その要因の1つとして、事件の参加者がこの事件について公言しないことを約束させられた点があげられるが、それ以外に、この事件後、ボストンを取り巻く状況が大きく変化したことや独立後の政治動向も影響していた。ボストン茶会事件は、直接的にイギリス本国との関係を悪化させ、事件後、ボストン港閉鎖やマサチューセッツ植民地の自治の制限などの厳しい制裁措置がとられることになった。こうした状況下で多くの反英運動支持者はボストンを脱出し、この事件の目撃者や参加者が減少した。また、レキシントンとコンコードの戦いで戦争状態に突入したマサチューセッツ植民地では、この事件を顕彰する余裕などなかった。さらに、本国を攻撃する側とし、

植民地は守る側という革命期の自己イメージが、ボストン茶会事件には当てはまらなかったことも、この事件を顕彰するのに消極的だった一因と考えられている。

こうした状況に変化が見られたのは、1812年戦争後であった。「第2次独立戦争」とも呼ばれるこの戦争は、愛国主義の機運を高め、独立革命の元兵士たちに対する関心を引き起こした。1818年、連邦議会は困窮した元兵士に対する年金法を通過させたが、以後、多くの元兵士が年金を申請するようになった。こうした状況の中で、1801年から1819年にかけて独立革命に関する回想録が20冊余り出版された。こうした回想録は、その後、ジェイムズ・F・クーパーやハーマン・メルヴィルといった作家たちの創作意欲を刺激することにもなった。さらに独立革命50周年記念行事もこうした傾向に拍車をかけた。1824年8月には独立革命に参加したフランス貴族ラファイエットがアメリカを訪問し⁶⁾、1825年4月にはレキシントンとコンコードの戦いを記念する祝賀が、同年6月にはバンカーヒルの戦いを記念する、バンカーヒル記念塔の起工式がおこなわれた。独立革命50周年は、翌1826年7月4日の独立宣言50周年の祝賀でクライマックスを迎えたが、この日に独立宣言の起草者であるトマス・ジェファソンとジョン・アダムズが死去したことは、一つの時代の終焉をアメリカ社会に実感させることとなった⁷⁾。革命50周年記念行事でボストンを2度訪問したラファイエットは、いたるところで元兵士を一人一人賞賛し、握手をし、会話をし、昔話に涙したが、彼の訪問はごく普通の兵士を英雄に持ち上げる効果をもたらした。こうした記念行事を通じて独立革命の参加者たちは英雄視され、再評価されていったのである。

その後1830年代になると、独立革命の伝統は、この時代の社会運動とその抵抗勢力の正当性を主張するよりどころとして用いられることになる。第6章で論じられるのは、1835年に10時間労働運動が最高潮に達した労働運動、および同じく1835年に英国の奴隷制廃止論者ジョージ・トムソンの訪米をきっかけに高揚した奴隷制廃止運動と反アポリショニズム暴動において、人々がどのような独立革命のレトリックをつかって、自らの主張の正当性を訴えたかという点である。労働運動関係では、ニューヨークで「労働者のための独立宣言」(1829年)を起草したジョージ・H・ヘンリー・エヴァンズ、1826年に「精神的独立宣言」を発表したロバート・オーウェン(父)、ニューイングランドの労働運動の指導者セス・ルーサー、

1834年にマサチューセッツ州ローウェルでストライキをおこなった女工たちの言説などが俎上にのせられている。他方、奴隷制廃止運動については、奴隷制廃止論者が独立革命の急進主義に親近感を抱き、独立宣言を引用するなどして自らの正当性を主張した一方で、奴隷制支持者たちは、奴隷制廃止論者の存在が「社会秩序に対する脅威」であって、合衆国憲法で保障された財産権を脅かすものであり、奴隷制廃止論者に対する暴力行為は秩序維持に必要であったとして、独立革命を引き合いに出して暴動を正当化した。また、1834年に設立された政党が、独立革命期の反英派にちなんで「ホイッグ」と名付けられたのも、独立革命の継承者としての自己認識からであった。

ボストン茶会事件の参加者だったジョージ・ヒューズが世間から注目され、公の場に登場したのは、こうした革命の再評価がなされた時期であった。第7章で著者は、1835年の独立記念日にヒューズがボストンに招待された際に取材をおこなった新聞記者との世代ギャップなどに注目しながら、この事件が「茶会」として「再発見」されるにいたった経緯について考察している。『ボストン・イブニング・トラベラー』紙の記者は記事の中で、この事件を引用符付きで「茶^{ティー}会^{パーティー}」と呼んだ一方、当時90歳を超える小柄な老人は、昔ながらの「茶の投棄」という語を用いていた。ではいったい、いつから「茶の投棄」は「茶会」になったのか？

著者はまず、この事件の前後からすでに日常レベルで庶民が「茶会」もしくは「ボストン港で茶を沸かす」といった表現を使っており、それが後の時代に口頭伝承された可能性を示唆している。他方、ボストンのエリート層の間ではむしろ「茶の投棄」という、よりまじめで適切な表現が好まれる傾向にあった。著者が調査した限りでは、1830年代初頭まで、マサチューセッツで出版された歴史書や回想録などの印刷物の中に「茶会」の語は登場せず、この語がタイトルに使われたのは1834年と35年に出版された2冊のヒューズの伝記が最初であった。こうした状況から著者は、「茶会」という語がエリート層の市民にとっては悪趣味もしくは下品な表現であり、冗談のネタにするには不謹慎とされていたため、こうしたエリート層の読者を想定した出版物の著者は、「茶会」の語を避ける傾向にあった、と結論付けている。では、そうした状況がこの約半世紀でどのように変化したのか、というのが次の課題となる。

この事件が再度注目されるようになったのは、第5章で論じられたよう

に独立50周年の前後、1825年ごろと考えられている。著者は、この時期以降、公的な発言の中で、この事件を示唆する表現が使われるようになり、それはこの事件が一般によく知られるようになっていたことの表れであると指摘する。その例として、ニューイングランドの労働運動の指導者セス・ルーサーの1830年代の演説と、マサチューセッツ州ケープコッドの先住民マシュピー族による1833年の「暴動」に関する新聞記事、1837年の奴隷制廃止論者オーウェン・ラヴジョイ殺害に対する抗議集会でのマサチューセッツ州司法長官ジェイムズ・T・オースティンの発言とそれに対する奴隷制廃止論者ウェンデル・フィリップスの反撃が取りあげられる。このいずれもが、労働者や先住民、ラヴジョイ殺害に関わった奴隷制支持者を擁護したり、批判したりする上で、彼らのしたことは茶会事件の参加者と同じである、違うといったレトリックを用いていた。ただし、いずれにおいても「茶会」の語そのものは使われていなかった。

では、「茶会」の語がヒューズの伝記のタイトルとして使われたのはなぜか。ヒューズが1833年に最初の彼の伝記作家となるホークスに見出されたのは、彼が妻の死後、同様に貧しい子どもたちの間を転々としていたところを近所の裕福な男性に救済され、彼のもとに身を寄せたところだった。これまで無名の貧しい元職人の伝記を競争の激しい出版業界で売り出すにあたって、伝記作家たちがあえてインパクトの強い、俗語的なタイトルをつけた可能性があることを著者は指摘する。また19世紀の第2四半期に入って、ボストンのエリート層にとって茶会事件は、印紙法暴動やボストン虐殺と比べれば、最も安全な事件であり、「茶会」という新たな名前は、その多義性ゆえに保守派も急進派にとっても好ましいものに変化していたことも指摘されている。19世紀のボストンの中・上流社会において茶のたしなみは普及しており、奉公人のガイドブックなどの中でも茶の入れ方は重要な要素となっていた⁸⁾。それゆえ、この事件を「茶会」と呼ぶことによって、この事件がコミカルで身近なものとなり、階級とジェンダーの逆転を示唆することになったのである。また、事件当時、参加者が先住民の仮装をしたことも、先住民の存在が脅威とされた時代においては言及されない傾向にあったが、1812年戦争後の先住民の弱体化、ジャクソン大統領による先住民の強制移住政策を経て、1830年代以降、脅威と見なされなくなったことで、先住民の仮装そのものが危険視されなくなっていた。

1835年7月にヒューズが公の場に登場した際、彼を独立記念日の式典

に招いた政治家や彼の肖像画を描いたジョゼフ・コール、その1年後に伝記を出版したサッチャーは、どのような形で彼を世間に紹介したのか。第8章では、第6章で指摘された社会状況の中で彼がどう位置付けられたか、式典での民主・ホイッグ両党の政治家の言説、ヒューズの当日の行動についての党派別新聞の報道、コールの描いた肖像画、サッチャーの手になる伝記が分析されている。ここでは、そのいずれもがヒューズを尊敬すべき独立革命の生き証人で、100歳にもなる身なりの良い紳士として、さらに暴徒ではない愛国者として紹介したこと、そうすることによって、この事件の急進性がそぎ落とされていったという点のみを指摘しておく。

最後の2章では、1873年のボストン茶会事件100周年から現代にかけて独立革命そのものや「茶会事件」がどのように顕彰されてきたかを扱っている。

1873年12月15日から16日にかけてボストンでは「茶会事件」に関わる3つの行事がおこなわれたが、ファニユエル・ホールで行われた婦人参政権協会の集会では、「代表なくしての課税は横暴」という横断幕が掲げられ、元奴隷制廃止論者のウエンデル・フィリップスやウィリアム・L・ギャリソン、フレデリック・ダグラス、婦人参政権論者のルーシー・ストーンやメアリ・リヴァモアが演壇に上がった。ボストン市が主催したファニユエル・ホールでの記念行事では、長らくホイッグ党／共和党の連邦下院議員とマサチューセッツ歴史協会会長をつとめたロバート・C・ウィンスロップが基調演説の中で、修正主義的な発言をおこなった。「我々は、当時の愛国的指導者が直接、この行為〔茶の投棄〕に手を下したかどうかは知らない。しかし、ベンジャミン・イーデスやポール・リヴィアのような、血の気の多い職人層の若者による自然発生的な反抗的行為であったと思われる」と述べ、暴政に対抗するには不法な暴力に訴える他なかったことを示唆した。他方、YWCAが主催した祝賀会では本来の意味での茶会が開かれ、昔風の衣装を身に着けた女性が茶を出し、男性はモホーク族の衣装を身につけて、ミニチュアの茶箱を記念品として配った。参加者たちは、「1773年12月16日、ボストン茶会事件」と書かれた横断幕とヒューズの肖像画で飾られた演壇に向かって座ったが、その演壇でなされたスピーチでは、まだ設立間もないYWCAの使命がこの町の労働者階級の女性たちにシェルターと雇用機会を与えることであって、[こうした茶会で] 富裕な女性たちがぜいたくさを見せつけるのは犯罪的行為であるといった批判もなさ

れた。

3つの記念行事に象徴されるように、この時代は、革命の意味や革命をいかに記憶していくべきかをめぐって、急進派と保守派の対立が鮮明になっていた。南北戦争後の経済恐慌のさなかであったこの時期、ボストンの保守派エリートたちは、独立革命期や1830年代の激動の時代の再現を恐れていたのである。おりしも革命期に主要な役割を担った3つの建物ファニエル・ホールとオールドサウス・ミーティング・ハウス、旧州議会(植民地議会)議事堂のうち、後者の2つが崩壊の危機にさらされることになった。最終的にはいずれの建物も保存されることになったが、その後、その他の独立革命期の史跡の顕彰や記念碑建立もおこなわれた。このなかには、「ボストン虐殺」跡地やボストン茶会事件ゆかりの旧グリフィンズ埠頭なども含まれた。

それから100年、ボストン茶会事件は、さまざまな政治運動で利用されるようになった。例えば茶会事件200周年にあたる1973年には、オールドサウス・ミーティング・ハウスでキリスト教諸派の指導者の主催による集会が開かれ、愛国者団体「独立革命の娘たち」やガールスカウトの代表者が同席した一方で、全国女性組織(NOW)は、平等権を合衆国憲法修正条項に加えるための運動の一環として、「平等権なくしての課税は横暴」という横断幕を掲げてデモ行進をおこなった。また、別の複数の団体はファニエル・ホールでリチャード・ニクソン大統領の弾劾裁判の要求とオイルショック当時に暴利をむさぼった石油会社に対して抗議をおこなう集会を開いていた。茶会事件当時に埠頭のあった場所から少し離れたところには、ボストン茶会事件の舞台の一つとなった東インド会社の「ビーヴァー」号の復元船「ビーヴァー2世」号が展示されていたが、当日、そこでは茶会事件の公式再現がおこなわれていた。ファニエル・ホールの集会に参加した人々は最後の演説が終わらないうちにそこへ向かい、6人の運動家が植民地時代の服装をして同船に乗り込んだ。彼らは、タールと鳥の羽を塗らたくったニクソンの人形を吊るし首にし、最終的にその人形と空のオイル缶3個を港に投げ捨てた。警察の発表によれば「ビーヴァー2世」号の事件を見守ったのは4万人だったが、彼らは声援を送って解散した。

1970年代には、ヴェトナム反戦運動と、ボストンの公立学校における人種統合を進めるための通学バス制度に反対する運動が展開されたが、ここでも茶会事件や「ボストン虐殺」が抗議行動の中で象徴的に利用された。

著者は、『民衆のアメリカ史』の著者として知られるハワード・ジンらによる反戦座り込みデモとその逮捕を例に挙げ、裁判でジンらがボストン茶会事件を引き合いに出して、抗議行動の正当性を訴えたことを指摘している。また、1970年にオハイオの州立大学で起こった反戦デモ隊に対する発砲事件の後に作られた反戦ポスターでは、「ボストン虐殺」の版画と事件当時の写真が効果的に用いられたこと、通学バス反対運動では、「ボストン虐殺」の再現をおこなった民兵隊の発砲音に合わせて、400人あまりがダイイン（抗議を示すための死んだふり）をおこなったことも指摘している。

他方、クリントン政権下の1998年には、テキサスとルイジアナ選出の共和党右派の連邦下院議員がボストンを訪れて「ビーヴァー2世」号に乗り込み、税制改革を訴えるデモンストレーションをおこなった。彼らは、「茶」と書き込んだ箱に法律の条文を入れて、それを港に投げ捨てようとしたが、この時、反対派の2人組が「労働者家族救済ボート」(Working family Liferaft)の表示を掲げてゴムボートで現れ、「あなた方の求める税制では労働者の家族が沈んでいく」と叫びながら水中に落ちかけた茶箱を拾いあげ、逆にメディアの注目を集めた。本書の執筆中、著者は十数年後のことなど予想すらしなかったであろうが、この共和党右派によるデモンストレーションは、現在、「小さな政府」を志向する市民集団が「茶会」と称している状況を見させる。

本書の最後に著者が取り上げたのは、現在、ボストンの観光ルートとして知られる「フリーダム・トレイル」周辺の史跡が一般市民に何を伝えてきたか、さらに普通の人々の歴史をどのように一般市民に伝えていくべきかといったパブリック・ヒストリーの問題である。「フリーダム・トレイル」は、ボストンの中心部に位置する公園「ボストンコモン」からチャールズ川対岸のバンカーヒル記念塔にいたる独立革命に関わる史跡散策ルートで、赤い線で示されている。このルートで結ばれた16箇所の史跡はいずれも革命に関わる政治的議論がなされた場所である。初めてこのルートが作られた1950年代においては、「自由の息子たち」のサミュエル・アダムズ、独立宣言書に署名したジョン・ハンコック、後に第2代大統領となるジョン・アダムズら、政治的指導者から見た独立革命史が中心となっていた。そこには一般の農民や職人、下層民はもちろん、ジョン・アダムズの妻アビゲイルなど著名な女性さえ存在しない一方で、植民地時代のボス

トンで生活していたはずの貴族の存在も消されていた。今日、ノースエンド地区にあるポール・リヴィアの家を訪れば、当時の親方職人の生活をかいま見ることができるが、この地域に当時存在していた職人や港湾労働者の生活の痕跡は残っておらず、革命期の庶民たちの騒々しい世界を想像することは困難である。

こうした状況において、貧しい靴職人だったヒューズはこの失われた民衆世界を象徴する存在になるかどうか、というのが著者の最後の問いである。ヒューズに焦点を当てた博物館展示によって、いかに普通の人々が歴史的事件に参加したのかを大衆に伝えることは可能であろうと著者はいう。同時に、庶民が主役であったとはいえない独立革命における彼らの存在を、博物館の展示でどのように示すのかという問題も提起している。

索引も含めて260頁というコンパクトな本書は、その体裁とは逆に重層的なテーマを扱っている。本書の通奏低音となっているボストン茶会事件は、世界史の必須事項として一般に知られているが故にかえって誤解されて記憶されている場合が多い。他方、この事件がいつからこの名前で呼ばれるようになったのかについては、著者同様、歴史家の多くも事件の名称については自明のこととしてあまり関心を持ってはこなかった。本書は、日本でもっとも有名なアメリカ史上の事件について、あまり知られていない側面に焦点をあてている。すなわち、この事件に参加したということを除けば、世間から注目されることもなかったであろう、1人の靴職人の目から見た独立革命のありようが描かれると同時に、この事件が後世にどのように記憶されたか、また、一般市民の多様な抗議行動のよりどころとして、この事件がどのように利用されてきたかが明らかにされているのである。

本書のタイトルからは想定できないが、本書では、19世紀前半の奴隷制廃止運動や反アポリシヨニズム暴動、労働運動でしばしば用いられる独立革命のレトリックについても扱われている。職人労働者による労働運動で用いられるレトリックは、従来、労働史研究において「職人共和主義」として分析される傾向にある⁹⁾。これまで革命の「伝統」として認識されていたものが、実のところ、著者が指摘するように革命50周年以降になって初めて再発見されたとするならば、「共和主義」の意味するところは何なのか。労働史研究においても「伝統の創出」をめぐる再検討が必要である。

注

- 1) ボストン商人と独立革命のかかわりについては、John W. Tyler, *Smugglers and Patriots: Boston Merchants and the Advent of the American Revolution* (Boston: Northeastern University Press, 1986).
- 2) A Citizen of New York [James Hawkes], *A Retrospect of the Boston Tea-Party, with a Memoir of George R. T. Hewes, a Survivor of the Little Band of Patriots Who Drowned the Tea in Boston Harbour in 1773* (New York: S. Bliss, printer, 1834); A Bostonian [Benjamin Bussey Thatcher], *Traits of the Tea Party; Being a Memoir of George R. T. Hewes, One of the Last of Its Survivors; With History of That Traction; Reminiscences of the Massacre, and the Siege, and Other Stories of Old Time* (New York: Harper&Brothers, 1835).
- 3) Eric Hobsbawm, and Terrence Ranger, eds., *The Invention of Tradition* (Cambridge, U.K., 1983); E. ホブズボウム・T. レンジャー編 前川啓治他訳『創られた伝統』(紀伊國屋書店、1992年)。
- 4) 日本における、「法王の日」と「ボストン虐殺」にふれた研究は、肥後本芳男「アメリカ革命期の群衆暴動と社会秩序の変容」古矢旬・山田史郎編著『シリーズ・アメリカ研究の越境 第2巻 権力と暴力』(ミネルヴァ書房、2007年)、pp. 42-47。印紙法暴動については、金井光太郎『アメリカにおける公共性・革命・国家』(木鐸社、1995年)、pp. 137-50。
- 5) Philip J. Deloria, *Playing Indian* (New Haven: Yale University Press, 1998), Chap. 1.
- 6) ラファイエットのアメリカ訪問に関しては、田中きく代「ラファイエットの凱旋と19世紀の祝賀政治」常松洋他編『アメリカ史のフロンティア I アメリカ合衆国の形成と政治文化』(昭和堂、2010年)、pp. 52-77。
- 7) 1812年戦争後の愛国主義の気運と2人の元大統領の死については、和田光弘「アメリカにおけるナショナル・アイデンティティの形成」『岩波講座世界歴史17 環大西洋革命』(岩波書店、1997年)、pp. 277-78。
- 8) 一例として Robert Roberts, *The House Servants Directory* (1827), pp. 60-63。しばしば現代のアメリカ人のコーヒー好きの要因として、ボストン茶会事件があげられるが、これは俗説である。19世紀に出版された多くの家政書では、好ましい茶のブレンド法や入れ方が教示されている。例として、Maria Lydia Child, *American Frugal Housewife, Twelfth Edition* (1833), p. 84.
- 9) Sean Wilentz, *Chants Democratic: New York City and the Rise of the American Working Class, 1788-1850* (New York: Oxford University Press, 1984), Chap. 2; S. ウィレンツ著、安武秀岳監訳、鶴月裕典・森脇由美子共訳『民衆支配の讃歌(上)』(木鐸社、2001年)、第2章。